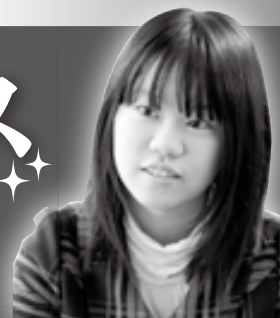


✦ 奥田あやと囲碁体験 ✦

指導者も必読！ ゼロから分かる

# 入門 エッセンス セミナー



奥田 あや 三段

time 7

こんにちは。本誌発売の頃はまだ残暑が厳しいと思いますが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

この入門講座は当初、全6回で終える予定でした。しかしいざ始めてみたら、お話ししたいことが次から次へと出てきてしまったため、ついついペースが遅れてしまうという誤算が……。そして先月号で6回を終えても、お伝えすべきことがまだまだ多く残っているという、申し訳ない事態に陥ってしまったのです……。

そこで本誌のY編集長に「あと3ヵ月の延長」を願い出たところ、トレードマークの笑顔で快諾していただきました。子煩悩な三児のパパ・Yさんに感謝です。

ちなみにYさんの次男は、小学1年生です。すでに初段の棋力だそうです。「もしかしたら将来……」などと期待したくなってしまいますよね。囲碁が子供の成長のための最適ツールであることは間違いないので、

皆さんもお子さんやお孫さんにぜひ囲碁を教えてあげてくださいね。

その際にはもちろん、この「入門エッセンスセミナー」をテキストにして——。

## 実戦＝互先編

前2回において、囲碁を初めて打つ人が経験者とハンディキャップをつけて対局する「置碁」の打ち方についてお話ししました。そのおさらいをここで行なうことはしませんが、次ページ下段のカコミで紹介しているように、過去6回分の内容を特設サイトで確認できるようになっていますので、そちらを参照なさってください。

というわけで今回は、ハンデなしの対局についてお話ししていきましょう。

### Profile おくだ あや

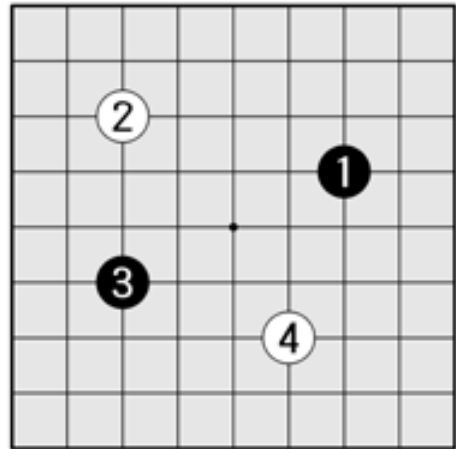
東京都出身。大淵盛人九段門下。平成16年入段。23年三段。東京本院所属。第27期女流本因坊戦挑戦者決定戦進出。第22期女流名人戦リーグ入り。第4回大和証券杯ネット囲碁レディース準優勝。

前2回でお話したのは、入門者が経験者と対局する際、あらかじめ石をいくつか置いてスタートするハンデ戦＝置碁についてでした。入門者が初の実戦を行なう際には黒石を九つ置いてスタートする九子局が妥当ということで、その打ち進め方から終局までの実戦例を取り上げました。

最初はもちろん勝てないでしょう。しかし実戦を重ねていくうちに技術的なコツもつかめてくるので、やがて勝てるようになります。なんとと言っても置石九子というハンデをもらっているのですから。

そして「九子局ならもう負けない」となったら、置石を八子に減らしましょう。これも負けないようになったら七子→六子→五子……と順次減らしていくのです。こうして置石が減っていくことで、自分の上達が目に見える形で実感できます。いつか置石がなくなる日が来るかもしれません。

とはいえ、いつも石を置いての対局ばかりでは、退屈してしまうでしょう。「置石なしの対局もしてみたい」と思うのが当然でしょうし、上達のためには強い人に教わることも大切ですが、実力互角のライバル



第1譜

を持つことが一番でしょうから。

というわけで今回は、同じ初心者同士で対局した時のためのハンデなし対局＝互先の打ち方についてお話ししていきます。

ではさっそく**第1譜**をご覧ください。初心者同士による互先の実戦例です。

黒1から白4といったように、立ち上がりはお互いに隅を占め合っていくのが一般的なのですが、なぜ隅から打ち始めていくのか——まずはこの点についての説明から始めていくことにしましょう。

★ 編集室からのお知らせ ★

本コーナーでは、4月号から入門講座を連載しておりますが、今月号（10月号）以降よりご購入いただいた場合、内容が途中からになってしまいます。そこで本講座に限っては、弊院ホームページのトップ画面中段にございます出版最新情報から「囲碁未来」誌のロゴをクリックいただき、そこからこれまでの記事をPDFにて確認できるようにしております。ぜひ新規ご購入者のみなさまにおかれましては、以下にまでアクセスいただければ幸いです。



↑ 上記のロゴをクリック

**URL** <http://www.nihonkiin.or.jp/publishing/mirai.html>



## 効率よく地を囲えるのが隅

なぜ隅から打ち始めるのが一般的なのかと言えば、それは「隅が最も地を囲いやすく効率的」という理由からです。言葉よりも図で説明した方が分かりやすいので、本ページに掲げた三つの図を比較してみてください。

まずは**1図**。黒石で囲った中央の黒地は9目ですが、この地を囲うために費やした黒石は十六子です。

これに対し、**2図**はどうでしょう？ 囲った黒地は9目で変わりませんが、費やした黒石の数は、半分以下となるわずか七子ですよね。同じ目数の地を囲うのなら石数が少なくて済むに越したことはないのは当然で、これが「隅から打ち始めるのが効率的」という理由に他なりません。

なお辺はどうかというと**3図**。ご覧のように、十一子が必要です。

というわけで「石の効率」を元にそれぞれを比較すると――、

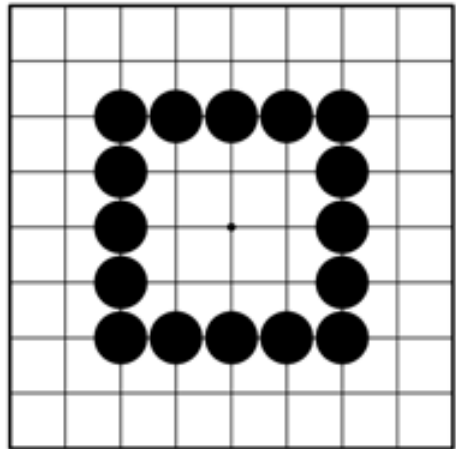
隅>辺>中央

という序列が明らかとなりました。地を囲うにあたっては、この順番を目安に打ち進めると効率的ということですね。

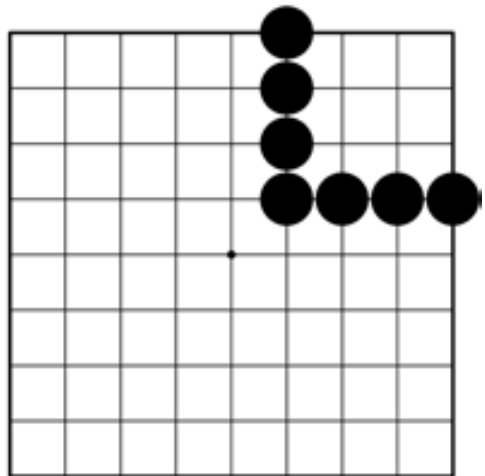
では続いて「具体的な隅の着点」についてですが、特に決まり事はありません。前ページの第1譜を見てもお分かりのように、黒白ともそれぞれ、思い思いの所に打っていますよね。

囲碁の序盤は、プロでも「これが最善の一手」と断言することはできません。「どう打っても一局」という言葉があるくらいですから。

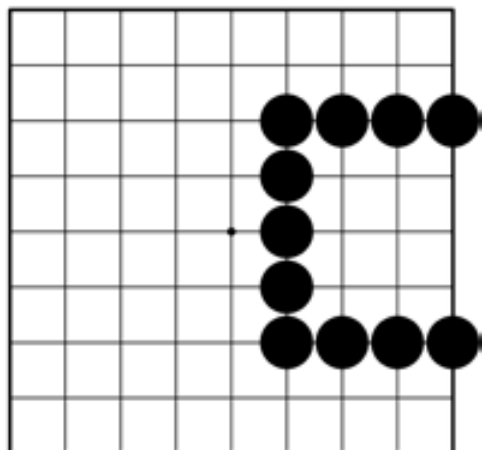
そしてこの「自由さ」こそが、囲碁の最大の魅力のひとつでもあるのです。



1図



2図



3図

## 「イメージと意図」こそ重要

17ページ・第1譜に続く、実戦の進行を見ていきましょう。

**第2譜** 黒は5と打ったのですが、この手は本当に素晴らしかった。私が黒の立場でも、こう打ったでしょう。

局後、黒のAさんに「どういう気持ちでここに打ったのですか？」と尋ねたところ、返ってきた答えがまた素晴らしく――

「ここに打てば、右上一帯が地になりそうかなと思って……」

とのことでした。

そうです。序盤においては、この「地になりそうかな」というイメージこそが重要なのです。

もちろん黒5の一手で右上が完全に黒地となったわけではありませんが、黒地に「なりそう」な雰囲気が出てきたことは間違いありません。本当に素晴らしい感性だったと思います。

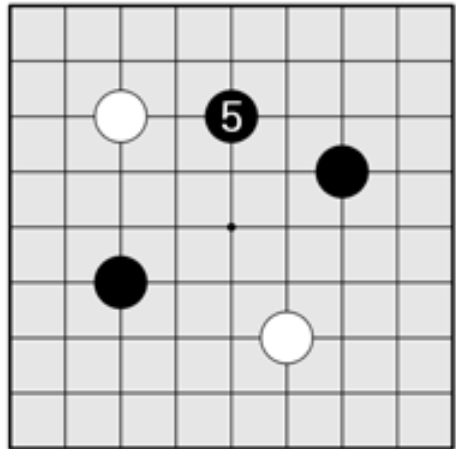
続いての進行が**第3譜**の白6でした。この手の意図についても局後、Bさんに尋ねてみましたが――

「左上隅を白地にしようと思いました」

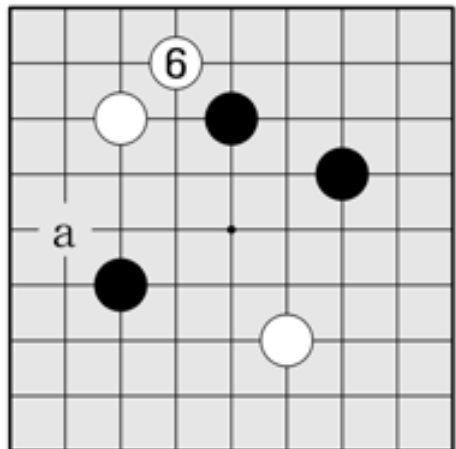
とのこと。白6を打つことによって、左上隅が「地になるかもしれない」というイメージを抱くことができていたということですね。

上級者の方々の目から見れば「白6ではなくaと打ちたい」などと、別の手が浮かぶかもしれませんが、しかし初心者のうちは、着手の善悪よりも「着手に自分なりの意思が込められているかどうか」の方が大切なのです。

なぜなら、入門者・初心者がいざ実戦を始めるにあたって、最も困惑するのが「何



第2譜



第3譜

をしたらいいのかが分からない」という点だからです。そしてこの戸惑いこそが、せっかく囲碁を覚えようと志した人を「やっぱり難しいからやめておこう」と遠ざけてしまう一番の要因となっていることは間違いありません。

従って「左上隅を地にしたい」という意思の元に白6が打たれたのであれば、私はこの白6を100パーセント支持したいと思います。Bさんの着手には明確な意図があるということで、その意図は決して間違っていないからです。

## 石が競り合う中盤戦へ

以下、両対局者の局后感想を元に、実戦の進行を追っていきます。

**第4譜** 黒7とオサえたのは「右上の黒地を確保したかったから」とのことで、文句なしの着想です。

白8も同様の考えで「左上に白地を作りたいかった」ということでした。正しくは白aの方が優りましたが、そういう意図があって打ったのなら、白8は非難されるべき手ではありません。

黒9および11は「左上の白を取ろうと思った」とのことでしたが、さすがにそれは無理な考えでした。Aさんも実戦を打っているうちに、自分のその方針が無茶だったかもしれないと気付いたようですが、そうやって「自分の失敗に気付く」のも、これまた非常に重要なこと。先月号でも触れましたが「失敗こそが上達への特効薬」なのです。

**第5譜** 白12の切りがなかなか鋭い反撃で、黒一子がアタリですから、黒は13とツナぐよりありません。

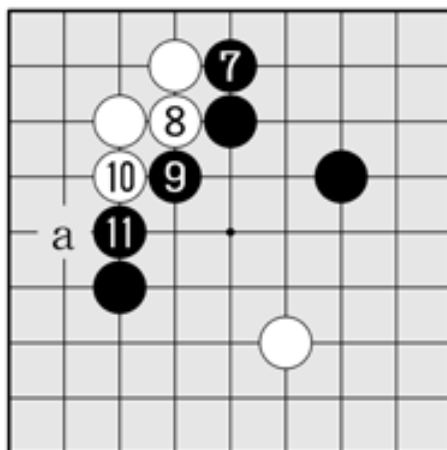
そして白14のハネが、これまた実に鋭い一手でした。狙いはもちろん「▲二子の捕獲」です。

こう打たれて黒のAさんは「まずいことになったかもしれない……」と、不安な気持ちになったということです。

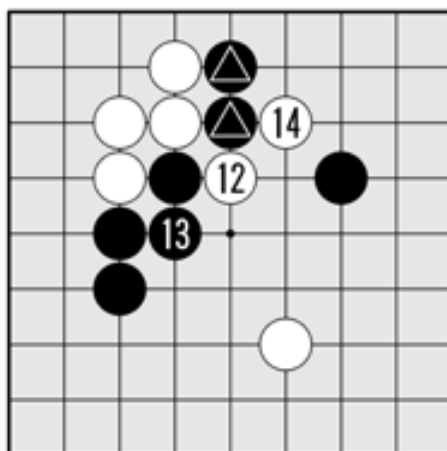
さあ、いよいよ碁は、両者の石が激しく競り合う中盤戦へと突入しました。

**第6譜** 黒15から白18までの進行については、特に触れるところはありません。

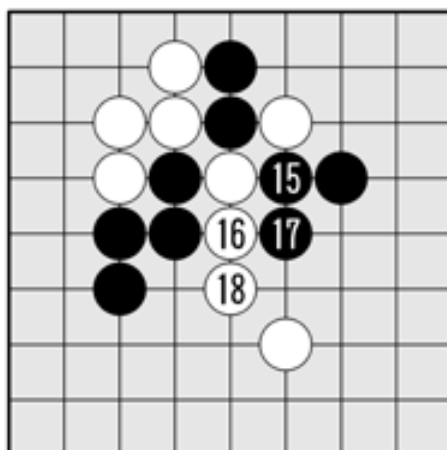
問題は黒の次の一手です。この手が本局の勝敗を大きく左右したのですが、皆さんならどう打ちますか？



第4譜



第5譜



第6譜

## アテる方向を…

**第7譜** 黒19が大変な失着でした。

この手の意図が「△を取ることにあったことはもちろんですが、白20と逃げられてみると、逆に黒二子がアタリに……。黒21と逃げてはみたものの白22と打たれ、黒三子が取られてしまいました……。

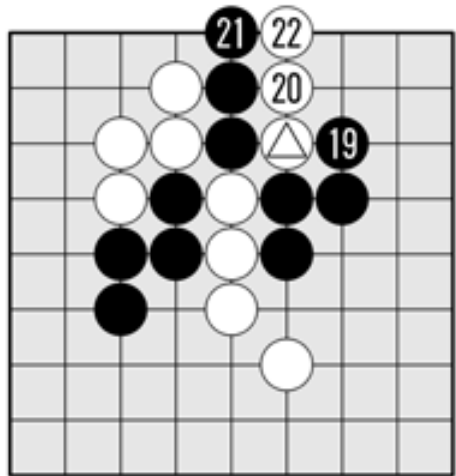
これはさすがに大きな痛手で、Aさんはこの時点で「負けを覚悟した」そうです。

では黒は19で、どう打てば良かったのでしょうか？

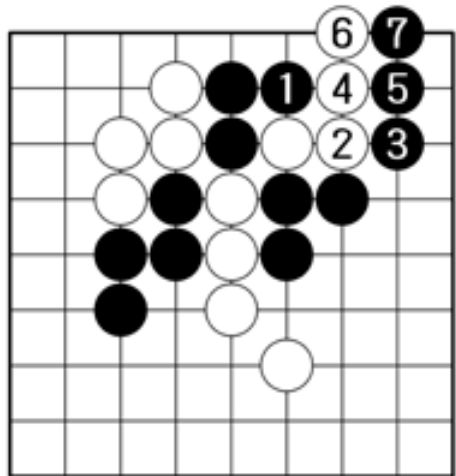
**4図** 黒1と、こちらからのアタリが正解でした。白が2と逃げ出しても、黒3から7と追いかけて取ることができます。

つまり実戦のAさんは、アテる方向を間違えてしまったのです。そして初心者の実戦においては、この「アテる方向の間違い」が実に多いのです。

アタリをする箇所というのは、必ず二つあります。「よし、アタリだ!」とばかり闇雲にアタリをするのではなく、その方向にも神経を注ぎましょう。それだけで皆さんの勝率は飛躍的にアップするはずですよ。



第7譜



4図

### \*\*\* 九路盤セットと十三路盤セットのご紹介 \*\*\*

十九路盤のセットはお近くのおもちゃ屋さんや、小売店などで比較的簡単に購入できるが、九路盤や十三路盤セットとなると、店頭でみかけることは難しい。東京、大阪、名古屋ならば、日本棋院の東京本院、関西総本部、中部総本部があるのでぜひ一度足をお運びいただきたい。

遠方の方にご利用いただきたいのはインターネットを使った日本棋院オンライン囲碁ショップや、電話注文・FAX注文対応の通信販売である。

写真①の九路盤セット(¥1,470)は、裏は七路盤として、また写真②の十三路盤セット(¥5,250)は裏は九路盤としても使え、さらに携帯性も抜群でお値段も手ごろ。まさに囲碁の入門キットとしてはうってつけの人気商品だ。



①九路盤セット ¥1,470



②十三路盤セット ¥5,250

- 本院  
千代田区五番町7-2  
JR・地下鉄市ヶ谷駅より徒歩1分
- 八重洲囲碁センター  
中央区八重洲1-7-20 八重洲口会館9F  
(東京駅/八重洲地下街直通)
- 関西総本部  
大阪市北区角田町1番12号  
阪急ファイブアネックスビル6F
- 中部総本部  
名古屋市中区榑木町1-19
- 日本棋院通信販売センター  
TEL 03-3288-8788 (平日9:00~17:00)  
FAX 03-5275-6844 (年中無休 24時間受付)
- 日本棋院オンライン囲碁ショップ  
<http://www.rakuten.co.jp/nihonkiin/>

## 方向転換の重要性

上辺で小さからぬ被害を出してしまった黒でしたが——、

**第8譜** 黒23、白24のあと、黒25と右下へ方向転換したのは、非常に的確な判断でした。

右上を黒aとオサえる手が目につくかもしれませんが、碁盤の端ですからね。全体を見渡せば「まだまだ小さい手」であることがお分かりになることでしょう。碁盤の上には黒aよりも大きな未開の地が、いくらでも残されているのですから——。

実際にAさんも局後「黒aと打つよりは25に向かう方が大きいと思いました」と語っておられました。

そしてBさんも右上のaにこだわることなく——、

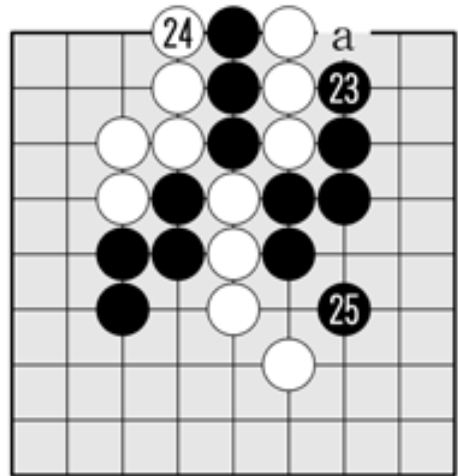
**第9譜** 右下を打った白26は好判断でした。ただし黒27に対する白28には、誤算があったようです。

黒29とアテられ、打ったばかりの白28を取られてしまったからですね。白aと逃げても黒bとされ、被害を大きくしてしまうだけです。

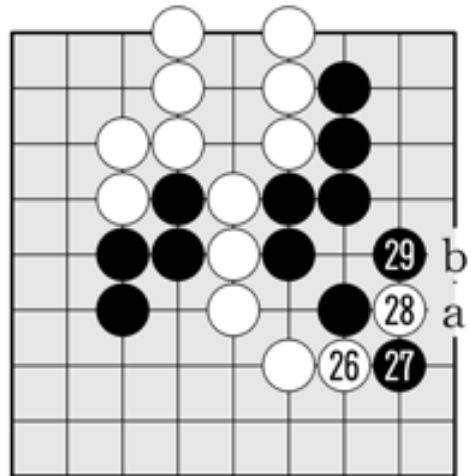
そのことに気付いたBさんは——、

**第10譜** 白30とオサえ、被害を最小限に留めました。してしまったミスは仕方ないので、このように「失敗を最小限に留める」ことは非常に大切。勝負における重要な心得として銘記してください。

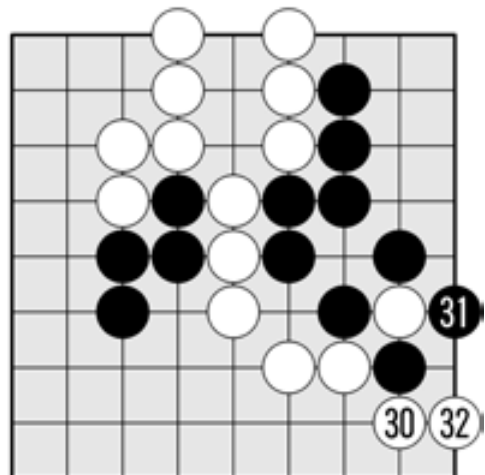
しかし続く白32は、部分にこだわってしまった感があります。碁盤全体を見渡すと、他に未開の地が残されているので、この白32は「小さい所を打ってしまった」ことになります。他の大きな方面に目を向けてもらいたかったのですが……。



第8譜



第9譜



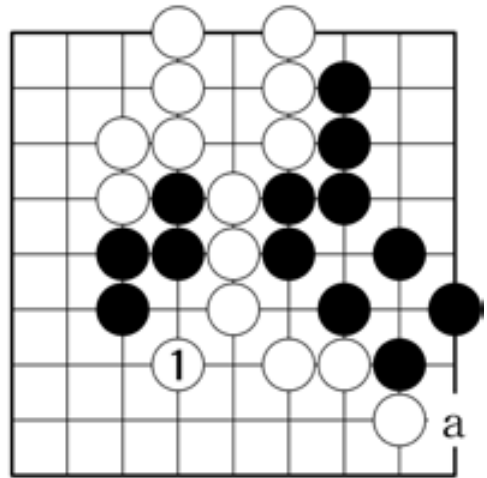
第10譜

従って白32では——、

**5図** 白1と左下へ方向転換すべきでした。右下の白a（実戦）よりこちらの方が大きいことは、こうして指摘されてみればお分かりいただけるはずですが。事実、Bさんも「言われてみれば当たり前のことなのに……。どうして白aみたいに小さい所を打ってしまったのだろう……」と語っておられました。

でも初心者のうちは、どうしても相手が打った所に目が行ってしまうものです。囲碁界で俗に言う「石音がした方へつられてしまう」という心理ですね。

従って対局においては「常に碁盤全体を視野に入れておく」ことが、何よりも重要となってくるのです。部分より全局——これが実践できる人ほど上達が早いのは、間違いありません。



5図

残念ながら今月は、ここでページ数が尽きてしまいました。

この対局の続きは来月号で。そして「終局」についてのより詳しいお話もできればと思っています。

## 指導者の方へ

今回は「互先の打ち方」をお話ししましたが、コミについてはあえて触れませんでした。というのも「この段階でコミについて話す必要はない」と考えているからです。

現在は「一局の碁を最後まで打てるようになる」ことが目的です。すなわち「終局が分かる」ようになってもらえればいいわけです。従ってそこにコミを持ち込む必要はないでしょう。終局してお互いの地を数え、黒の5目勝ちだったなら、そのまま「黒5目勝ち」で何の問題もありません。それを「実はコミというものがある、本当は白の1目半勝ちなんだ」とやってしまう

のは、初心者を混乱させるだけだと考えます。

一局を無事に打ち終え「どちらの△目勝ち」を確認することができたのなら、初心者にとっては、それだけで大変な感動なのです。その点を大いに褒めて「ではもう一局、今度は黒番と白盤を入れ替えて打ってみましょう」と運んであげてください。本来「互先」とは、そうした意味（互いに先番を持つ）なのですから。

そしてもう一点。本文の中でも繰り返し触れましたが、着手が最善ではなくても「意思のある手」であれば、それを尊重してあげてください。失敗に関しては、本人たちが自ら自然に学んでいきますので……。